

「嫌中・嫌韓」に異議 日中出版人が交流

「冷静に伝える努力訴え」

日本で隣国を強く批判する本や雑誌が数多く出版されている現状に、日中の出版人から「冷静に相手の姿を伝える努力も必要ではないか」との声が上がっている。日本では中国書籍の翻訳がまだ少なく、中国への理解を深める余地があるとして、出版人同士の交流を進める動きも出ている。

日本の出版人の間にも危機感
は共有され始めている。本や雑誌の編集者やライターで作る労働組合「日本出版労働組合連合会（出版労連）」は4日、東京・本郷で「嫌中嫌韓」本へのイトスヒイチ」と題したシンポジウムを開き、約110人が参加した。

基調講演したフリーライターの加藤直樹さん(47)は「仕事帰りに夕刊紙の韓国の悪口を読んでいる今、私たちは取り返しのつかない事態の前に立っている」と訴えた。

加藤さんは関東大震災後の東京で流言から起きた朝鮮人、中国人の大量虐殺を地震発生時から順を追ってつづった「九月

「良書こそ解決の道」

日本側にも危機感

東京の路上でを今春出版した。「90年前の出来事が今のレイシズム(人種差別)とつながっていると考えた。読んだ方からもちょうこれは言の出来事ではない」と言われた」と、長い間くすぶっている民族差別の意識が再び表面化した現状について語った。加藤さんの本は小さな出版社から発行されたが反響を呼び、3刷で1万部に達している。

会場から、意見が相次いだ。大手出版社で週刊誌編集長を務めた男性は「日本の週刊誌は95年のオウム事件から抑制を失ってしまったと感じる。(現状は)『異物排除』をするようだ。中国、韓国批判の記事では、相手の言い分を聞いていない」と嘆く。出版社の営業職の男性も歴

史教科書の記述が問題になった10〜15年前から出てきてインターネット上の『世論』があおった。それに対して、学者たちが有効な反論をしてこなかったと述べた。

どう対処したらよいか。フリーライターの男性は「よりよいものを作ることこそが解決につながる」と話し、賛同する声が上がった。

5月に河出書房新社の20〜30代の社員4人が企画し、多様なジャンルの18冊の本を集めた「今この国を考へる―『嫌』でもなく『呆』でもなく」と題したフェアに参加して、店内にコーナーを作った書店は、全国で200店を超えている。

【青島 野】

①段躍中さんから開いた交流会で握手する日中の出版関係者②交流会であいさつする段躍中さん③いずれも東京都文京区で3日、青島市撮影



国籍超えて 懸念を共有

「中国は確かに問題をいろいろ抱えている。だが日本で、中国の今の様子がうまく伝わっているとは思えない」。中国関連の書籍の翻訳・出版を多く手がける日本僑報社(東京都豊島区)の段躍中編集長(56)はこのように語る。

中国湖南省出身の段さんは「中国青年報」の記者を経て1991年に来日した。東京と北京を拠点に、出版活動や中国の大学生らを対象とした日本語作文コンクールなどを続け

てきた。段さんが99年に設立した日本僑報社は、中国で評判になった小説の日本語訳や、日中交流に長年取り組む人々をテーマにした本など、200以上を出版してきた。

段さんは最近、日本の書店に中国に対して敵しい内容の本や週刊誌が並んでいることに心を痛めている。「日本には表現の自由があり、中国を批判する本が売られることに反対はしない。でも日本の書籍の過激なタイトルや内容によって中国の実際の姿が読者に誤解されている面もあると思う」と語る。「中国各地には日本に好感を持つ人もいるし、日本に伝えるべき優れた文化や長い歴史もある。なのに大量に出版されている批判本の陰に隠れてしまっている」と懸念する。

日中国交正常化(72年9月29日)や日中平和友好条約締結(78年8月12日)の節目の時期に「日中友好読書月間」や「日中友好子ども読書ウィーク」を設け、指定した推薦図書感想文を募ることを考えている。段さんは「ビジネスマンや学者など

- 集会を開いた出版労連のメンバーらが5月下旬以降に、中国・韓国を批判する本について、知人の書店員10人に意見を聞いたところ、「売れる」ことに悩みながら、問題を感じている様子がうかがえた。主な意見を紹介する。
- 「確実に売れるタイトル(本)は、切らさずにきちんと売らなければならぬ。(一方で)意地と手前勝手な責任感で、大きな声に消されかねない小さな声を並べ続けたい」
- 「(いわゆる『嫌韓・嫌中本』)は、誰かを攻撃したい、その欲望をたぎつけようという風が吹いてしまっている。共助の道を模索するよりずっと楽だから、なんとなくスツキリするから、自分たちだけがすばらしいような気持ちになれぬから、それだけなのじゃないだろうか。何も考えない結果のように思えます」
- 「(『嫌韓・嫌中本』)は、わかりやすいストーリーを組み立てて、刺激的に書かれていないか。そのわかりやすさには読者は安心するのではないだろうか」
- 「差別感情は昔からあったのだと思います。『要因らしきもの』を一つ一つ『声に出して』批判していくことでしか状況を変えられることにはできないと思います」

「刺激的で売れる」書店員悩み

の間に『対立をあるより、今の中国の現場感を伝える良書をたくさん出してほしい』と期待する声は少なくない」と話す。

これまで日本で紹介された中国関連本について「分厚いうえに(解説が不十分な)直訳的な内容も多く、日本人の読者にとって読みにくい面もあった」として、より読者の需要や趣向を尊重した出版活動を目指すべきだと訴えている。

攻撃的な本 作る側問題

東京都文京区で3日に開かれた日中の出版関係者の交流会には、中国政府の出版部門や出版社の幹部、日本の大手出版関係者ら100人余が出席した。日本側の参加者からも現状を懸念する意見が出た。

全国出版協会の上野博正理事長は「相手の批判を繰り返すだけでなく、時間をかけてでも双方納得のいく打開策を見いだす必要がある。攻撃する本が増えているのは作る側の問題だ。互いに誠意と英知を結集して取り組みれば前進が可能だと信じている。日中には共通の価値観もあり、歴史や伝統を自覚したうえで、発展に向けて実行することが(出版業界に)望まれている」と訴えた。

外国書籍の輸入などを手がけるトランスの小田厚海外事業部長も「出版界の人間として、日中の人々に寄与するため、良い本を伝えていく義務と使命がある。互いにもっと切磋琢磨し、ビジネスの発展にもつなげたい」と話した。

交流会に参加した日本の出版社は過去最高の約30社に増えた。両国の出版業務の進め方に違いはあるものの、中国と協力を望む出版社が少なくない事情もつがわせた。中国側から「日本市場はわが社にとって重要で、日本の出版社と連携していきたい」といった声も出た。「土産」